

新潟県発

医師のキャリアを考える

医療系マガジン

December. 2015

# ニイガタプラス

## Vol.4

新潟県厚生農業協同組合連合会

新しい時代に応える医療を



# NIIGATA+



# 新潟から世界へ 新たな医療を携えて ともにオールを漕ぎ出そう!

国立大学法人新潟大学 新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器内科学分野 教授、肝疾患相談センター センター長

## 寺井 崇二 教授

### Special Interview

スペシャルインタビュー

2003年に、世界初の「自己骨髄細胞投与療法」を山口大学病院で行い、一躍脚光を浴びてから十数年。国内はもちろん、海外からも患者が殺到したという名医が、新潟大学で研究を開始したという。今日は、その研究を通して、新潟で達成したい夢を伺おうと思う。



#### Sun Ship (名称)

新潟大学の消化器内科をブランド化していくために、赴任後すぐに制作した「Sun Ship」の公式ロゴマーク。Sunとは太陽、また第3内科の“3”という意味があり、ヨットと太陽をモチーフに、消化器臓器が描かれている。すべての消化器を診られる医師の育成、研究開発の象徴。

<http://www.med.niigata-u.ac.jp>

#### 世界初の手術成功により 待っていたのは報道陣と 多くの肝臓病患者だった

「一度、15年前の話をしよつ」  
2015年1月、新潟大学大学院医歯学総合研究科、消化器内科学分野の教授に就任した寺井崇二先生は話し始めた。

「当時、肝臓のマスター遺伝子探索の研究をするため、渡米していました。リスクある研究の成果を一人で上げられたことは評価されたものの、もっと具体的に患者の病状を治療できる開発に取り組もうと、次の目標を持って帰国しました」

アメリカに在る間に、肝硬変の患者の骨髄を採取して肝臓へ投与するという着想を得た寺井教授。

2000年、遺伝子同定の論文を仕上げた山口に戻ると新たな研究を重ね、その手法で肝臓の再生能力が向上することを見事に証明する。その3年後には、世界初の「自己骨髄細胞投与法」の治療を山口大学で行っていた。

「NHKニュース」おはよう日本」で実施のことが報道され、その生放送の直後自己骨髄採取にオベ室に入りました。手術後、病院の外では、すごい数の報道陣に囲まれて、翌日、記者会見をしました。そして全国から問い合わせが殺到するようになりました」

寺井教授らチームで決めた適応基準（全身麻酔が可能であること）で手術の可否を決めていたため、断らざるを得ない患者がいることに心を痛めながらも、国内の大学病院や韓国の大学、医療研究センターなどさまざまな病院で治療を実施した。

「一方で、できるだけ適応基準の幅を広げたい」と研究を続けています。その最中、今回の赴任で新潟に来ました。新たな出発です」

#### 山口から惜しまれながらも新潟へ しかし、全国の患者の反応は “通いやすい”という喜びの声も

未知なる領域が多い消化吸収代謝系の複雑さに惹かれて専門を選んだという寺井教授。

「例の再生治療の手術成功後、国内外問わずゼカンドオピニオンの患者さんが訪れるように。そ

れは、「診断できない症状、治療できない





### 新潟大学医歯学総合病院

〒951-8520 新潟県新潟市中央区旭町通一番町 754  
TEL 025-223-6161 <http://www.nuh.niigata-u.ac.jp/>

【病床数】825床  
【診療科目】循環器内科、内分泌・代謝内科、血液内科（第一内科）/腎・膠原病内科、呼吸器・感染症内科、心療内科（第二内科）/消化器内科、肝胆脾内科（第三内科）/腫瘍内科/精神科/小児科/消化器外科、乳腺・内分泌外科（第一外科）/心臓血管外科、呼吸器外科（第二外科）/整形外科/形成・美容外科/小児外科/皮膚科/泌尿器科/眼科/耳鼻咽喉・頭頸部外科/放射線治療科、放射線診断科（放射線科）/産科婦人科/麻酔科/脳神経外科/神経内科/口腔外科系歯科/矯正・小児系歯科/予防・保存系歯科/摂食機能・補綴系歯科



新潟大学大学院医歯学総合研究科 消化器内科学分野 教授  
肝疾患相談センター センター長

**寺井 崇二** ●てらい しゅうじ

1990年 3月 山口大学医学部 卒業  
1990年 6月 山口大学医学部附属病院医員 研修医  
1992年 4月 山口大学大学院医学研究科 入学  
1997年 2月 同上 修了  
1998年 7月 アメリカ国立がん研究所 (NCI, NIH) 客員研究員  
(厚生省新対がん10年戦略海外派遣研究員)  
2000年 8月 山口大学医学部先端分子応用医科学講座 寄附講座教員  
2002年 4月 山口大学医学部先端分子応用医科学講座 助手  
2006年 11月 山口大学大学院医学系研究科 消化器病態内科学分野 講師  
2010年 4月 山口大学大学院医学系研究科 消化器病態内科学分野 准教授  
山口大学医学部附属病院第一内科 副科長  
2012年 5月 公益財団法人先端医療研究財団  
先端医療センター病院 肝再生科部長 (兼任)  
2015年 1月 新潟大学大学院医歯学総合研究科 消化器内科学分野 教授

めには、まず基本を身につけ、次に世の中の規制と戦いながら新しい治療を生み出し続けていくこと。この開発を通じて国内外の大学、機関の次の教授、リーダーになり得る若い人材の育成につながるという。

「山口大学にいた頃、ある親子が私の進めたい研究プロジェクトに寄付したいと申し出て、私のもとを訪ねてくれました。お父様が肝硬変症で骨髄の再生医療を模索されましたが、適応がなく亡くなってしまった。ご主人の望んだ治療法開発のため寄付したいと、奥様と小学生の娘さんがお話しされました。こういう患者さん、家族を救うために、さらなる努力をしたいと今まで以上に思うようになりました」

研究し続けて15年。多くの功績を残してきた

た寺井教授だが、まだまだ道半ばだと言っ。「今まで、患者さんご自身の細胞を使った治療法をメインにしています。今後は他人の細胞を使つての治療もできるよう、応用範囲を広げ、効果を上げる研究に取り組みます。同門の先生方とオール新潟で基盤となる臨床データをとり、さらに課題を明確にした上で今治せない消化器疾患に対する治療法の開発を行い、教室を日本を代表する消化器病研究機関と言われるように育てたい。全国へ羽ばたける人材を育て、そして、ともに世界へ挑戦していきたいですね」

寺井教授のSUUNO Shiro号は、航海を始めたばかり。世界から患者が訪れる日は、どうやら近そうだ。



病気をなんとかしたい」と、新しい治療法を常に研究・開発していたことが話題になったからにはほかなりません」

二ケースになったオベから12年が過ぎ、肝臓病研究の恩師と縁があった新潟へ赴任。新転

る医師は、患者から必要とされている。そんな医師が増えれば、患者だけでなく、そこで学びたい若手医師も増えるだろう。

「臨床で新しい医療を取り入れ、良い医師を育てたい。そのために今やることは、まず消化

### ここ新潟へ患者を呼び 総合消化器内科医が施す スペシャルな治療をめざせ

「研究コアは大きく分けて脂肪化、線維化、がん化、免疫、そしてバイオマテリアルを用いた低侵襲機器開発チームです。機器開発の5つのカテゴリーで、今治せない病気に取り組みます。そして最

後は、今診断のつかない病気に取り組むことです。医療の常識は、科学の進歩によって日々変化し、修正していくものです。例えば、私が医師になったばかりの頃は心配なと言われていた「脂肪肝」も、今では肝炎や肝硬変の主要な原因と言われるように問題点が新たに明らかにされています」

医療の速い流れをキャッチアップしていくた

地での任務は新潟大学の消化器内科をブランド化するこ

「特に東京から通っていた患者さんは、私の新潟赴任をとても喜んでくれました。新幹線で2時間ですから、もちろん、新潟市には空港もあり、とにかく交通の利便性が高い。新潟なら、全国から患者さんを呼びやすい環境がすでにあるのです」

一つの時代も、新しい医療を開発でき

器すべてを診られる医師を育てていくこと。そして、国内外の他大学と競いながら、新潟で一番ではなく、世界で一番をめざしていきたい。やる気のあるClinician Scientist(型を破る人材)の育成がその鍵を握るでしょう」

新潟から世界へ  
新たな医療を携えて  
ともにオールを漕ぎ出そう!